

1965.

# 冬山合宿報告書

信州大学山岳会  
上田山岳部 (SUAC)

(目次)		(頁)
1. 計画から準備まで		1
2. 計画概要		2
3. 行動表		3
4. 行動概要(気象・天候状況)		3
5. 係報告(装備・会計)		8
6. 反省会報告		10
7. 感想文		12
8. O.Bの皆さんへ		13
9. 屏風東壁登攀に成功!		14
10. 通信		14
11. 編集者気付けたいこと		16

- (1) 期
- (2) 場
- (3) 登
- (4) 登

# 1. 計画の準備まで

小宮 良雄

今合宿は、年度当初の総会で決定された年間計画に従って行  
った。総会当時、合宿地を穂高北尾根と決定したのは、比較的  
良く知っている場所でもあり又、槍穂高を中心に行わねばならぬ  
が部の積雪期の記録の中で、空白地帯で、しかも魅力ある尾根  
があるという理由からである。その後、部員の技術的内題や人員構  
成等の点から、当初に立った慶応尾根より最終キャンプの前穂  
に出し北穂をアタックする計画を変更せざるを得なくなった。同じく取  
り付きを慶応尾根とし、B.C.慶応尾根末端、C.I.2500mヒーク、C.II.  
五峰より梨穂をアタックする計画が最終的に決定された。計画段階  
で、相互の連絡不備や、多くのO.B.の計画に対する無関心な  
点も、問題となるところがあります。又、準備段階に入ってから一部の部員  
の理解に苦しみ、どのような行動があり残念であった。  
又、係の不手際から最終計画の計画書の配布が遅れ、関係各  
方面に不迷惑をおかけした点について深くお詫言致します。

余白に何とでもしようかと考えていたら……？

上田の山男

一 俺は上田の山男

同じお前も山男

どうせ俺等は二の世では

お前も二の世の山男

二 お山へ行こうと言う時は

行かなくておくれよ親父

死ぬも生きても二人故

行かなくておくれよ親父

三 ガイル結ばに何変わる

お山へ行こうよお前

お前も二人故

お前も二人故

お前も二人故

歌詞を考へてみる

## 2 計画概要

① 期間 : 1965年12月22日(木) ~ 1966年1月5日(水) [15日間]

② 場所 : 北根又 前穂高岳 北尾根 (慶応昆根社前) 前穂高岳登頂

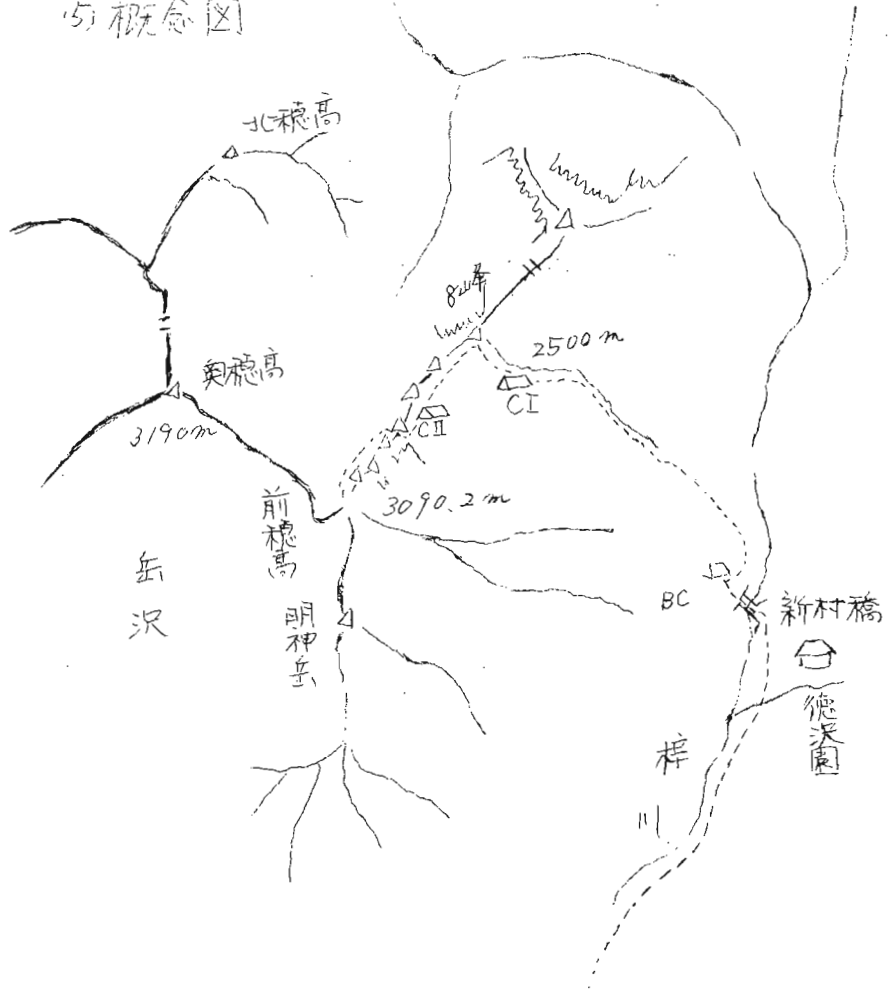
③ 登山型式 : 極地法

④ 参加人員構成

氏名	身分	役割	備考
小市良雄	二信女	C.L	
吉川 守	越前女	記録係	
岡村 紅雄	化工3	S.L 合計	
佐々木好郎	農学2	裝備	
栗 良 明	紡工1	"	
河原 洋	機織1	食料	
森田 祐吉郎	高校教師		

12月27日 B.C.A. 3

⑤ 概念図



3. 行程表

上田	三ツ湯	BC	CI	CI	前穂	足尾全	備考
		大野山	(12.20~12.22)	(12.20~12.22)			
12/23	6					370kg	入山
24		6				180kg	BC建設 ボック
25	兼田						休養
26		6				50kg	BC系結 取付穴調査ボック
27			6			150kg	CB兼田BCA ボック
28			4				CI建設 ボック
29						35kg	CIボック CI菜箱
30						40kg	CI建設 ボック
31							沈
1/1					2		アタック 運送
2					2		アタック 運送
3			4		3		CI撤収
4				7			CI撤収
5							下山

4. 行動概要

1983年12月23日(木) 雨(上田) 雪(松本) 曇(甲子湯)

上田から三ツ湯に登山。して下。低気圧が今日は日本付近を通過して影響が一瞬。天候は悪かった。尚低気圧通過後冬型に陥る模様。大陸高気圧は日を追って発達している。

マイクロバス

上田発(8:15) → 松本(10:30~11:00) → 甲子湯(14:30~15:30) → 延池建設小屋(16:40) → 並ボック:建設小屋(17:05) → 甲の湯(17:20~35) → 建設小屋(18:30) → 就寝(20:30)

行動時間 { マイクロバス 6時間15分  
歩行 } 時間

マイクロバスで上田を出发(上田の一部の厚刻氷(1mは置ざり)と降雨、降雪(青木峠、地蔵峠で5~10cmの積雪)のため)が、甲子湯の山道(湿潤の不凍れ)と諸々の悪条件のためかなり時間がかかった。甲の湯から延池建設小屋までは積雪30~50cmで

先行者のトレスが全く消えてスガラツセル歩行はさほどおしくも多く汗も  
時間は遅れながら予定通りの行動は終了。

12月24日(金) 雪 風強し 気温  $-30^{\circ}\text{C}$   
〇引続き天候は予報通り 気分も晴れた { 低気圧の通過後冬型小気圧  
よだ新風が強し気温も  
(降下気味である)

〇起床(5:30) 食事(6:30) 建設省小屋出発(8:30) - 木村小屋(9:45~  
~10:30) - 明神(12:45) - 新村橋(14:50) - 奥又本谷沢出合の梓川  
系B.C建設(15:30~16:00) - 建設省小屋到着(20:40)  
就寝(23:00) 行動時間 12時間10分

〇全員BC建設のためのボツカ、下山用食糧、1日分と予備食料、個人装備を残し  
1人当り30~40kgの担荷量であったが、行程と担荷量の目算の甘さ、出発時に於  
ける行動の遅鈍性、日常生活の不節制からくる身体的衰弱、降雪と強風による  
寒さ等折重なる悪条件により疲労が累加して1名は歩行困難、2名は吐きあげて  
食欲を絶して欠食するなどの脱落者を出した。翌日の行動が安心される。  
各隊員の行動力の積極性と敏捷性、Leaderの判断力及び統制力に欠陥はなかったか?  
計画性、忠実性、積極性、敏捷性の目覚を促したい。

12月25日(土) 雪 風やや強し (降雪多し)

〇大陸高気圧の一部が分離して移動性高気圧が揚子江流域に現れ西高東低  
の冬型がくづれてきた。明日あたりはこの高気圧が日本付近を通過するため今日の降  
雪止み天候快復が期待される。

〇[地蔵]

起床(5:00) 朝食(6:30) 就寝(19:30)

〇降雪、風ともに昨日より多い模様であり、昨日の疲労過度のため滞滞に決める。  
昨日の脱落者も喜びとたんに元気快復、食欲進めと食糧の食を泣く。

12月26日(日) 薄曇、午後小雪 気温  $-5^{\circ}\text{C}$

〇移動高が房総沖と島島沖に分離しぬけた後、大陸高気圧は1048mm角が冬型小気  
圧であるが、天気は良くなりである

〇起床(4:30) 朝食(6:00) 建設省小屋出発(7:10) - 木村小屋(8:15~30) - 明神  
(9:55~10:10) - 徳沢園(11:50~12:05) - BC(12:35~13:00) - 慶応尾根和論取付  
き偵察並に1700m地味までボツカ(14:30) - 偵察往復(15:35) - BC到着(15:50)  
行動時間 8時間40分、

〇昨日の休養、担荷重20時弱、無降雪という好条件のため、一昨日のトレスが殆んど消えて  
い下にも拘わらず、BCまで5時間20分と1時間35分も短縮できた。今日も比較的風が強

かつたので徳沢は川原に出なりで夏道を通って行下。慶応尾根根取付尖は奥一本谷の梓川出合に300m程入った所である。取付尖より標高差150m位までは森林密度も高くかなり急な登りである。

○12月27日(月) 晴 気温-8°C

○三陸沖と満州南部に高気圧があり、日本海中部と北洋半島沖に低気圧があって北部は晴れるが他は曇、大陸高気圧が完全(1056mb)とつあるので、冬型になりそうである。

○起床(5:30) 食事(7:00) BC発(8:55) - 慶応尾根鞍部(2200m地点) 予備(14:00~14:45) - BC到着(15:20)

○今日(エモ)出るとは、担荷能力の衰から支障を来す恐れがあるためボツ切とする。慶応尾根は下羊は森林密度が高く極地的にかなり急な登りがあり、ツマムカが臆れある部分もある。積雪量は50~150cmで羊に使うと多くなる。2000m地点からは次第に森林密度も少くなる。帰途は慶応尾根鞍部より夏道(本谷を下る)から上った他のパーティーのトレースを辿り下る。本日OB森田氏食糧10kgを担荷してBCへ入る。

12月28日(火) 晴の曇 午後雪 気温-6°C

三陸沖に低気圧があり、日本海の高気圧が日本をほぼ横に、おおむね低気圧が満州あたりに完全し天気は下り坂。

起床(2:30) 食事(5:00)

本隊: BC発(7:00) - (4ピッチ) → 慶応尾根鞍部(9:55~10:15) → 2500m地点 CI(10:55)

予備: BC発(7:25) - (本谷を登る) → 慶応尾根鞍部(9:30~10:15) → 2500m地点 CI(10:55)

本隊: 逆ボツカ CI発(12:25) → 慶応尾根鞍部(12:40~13:00) → CI着(14:10) 所要時間 7時間10分

予備: CI発(12:30) → 慶応尾根鞍部(12:50) → BC着(13:50) <sup>6時間前</sup> 25分

○下羊部は昨日のトレースのあとがそのままだけり残り、鞍部まで3時間弱。

2500m鞍部より2500mCI予定地までは下羊よりかなり急な登りで、積雪量も多し多く、月当たりも強くなるが、先行パーティーのトレースのおかげで1ピッチ40分程度で登り、CIを八峰頂上まであけるかどうかの差だが、カヌで視界がさかぬいたため小管が偵察した結果、予定通り、CIは2500m地点とする。18:00頃、CIテント内でエモの食糧難事あり。BC、CI間でトランシーバーの受信試験、感度良好なり。

12月29日(水) 晴れ。気温 10°C。

日本海に低気圧が張り出し、季節風も強まり、ときどき大陸高気圧(1066mb)が張り出してきて、季節も進んできたので大雪も予想される。

CI:起床(6:15) - 朝食(7:30) - CIへの荷上げ 1210kg

CI発(9:35) → 八峰頂(10:05) → 七峰頂(10:55~11:15) → 七六峰中道(30分待ち) → 六峰基部(13:00) - テポ - CI着(14:25); 逆ホッカ -

CI発(14:45) → 2500m 基部( ) → CI着(16:10) 6時間35分

B.C.:起床(6:30) - 朝食(5:30) - B.C. 徹夜。

B.C. 発(9:00) - (尾根) → 2200m 地点(12:30~13:00) → CI(14:00) 5時間。

低気圧の張り出しで、随分暖かくなり、眠るにしてみました。昨夜より積雪量(30~50cm)

八峰まで下ったホッカのトレースで登るは比較的楽であったが、八峰より先は、八峰にcampを出しているpartyが互いにけんけん合っているのとトレースがなく、小倉山岳会、法政大偵察隊とワカヤとカメのカケツコみたいに六峰基部に到着。六峰の登りは高度の登攀を要する。時間が遅く、アルム隊(3名)が登攀準備、かなり待たれることを覚悟し、ここにテポして帰る。

12月30日(木) 晴れ、昼頃より風雪に変わる。気温 -10°C

低気圧の通過で冬型となり、季節風が一層強まる天気も悪化した。9刻になって月は強まり、15%程となる。

起床(3:00) 朝食(4:30)

トレス隊(2名): CI発(6:35) → 八峰(7:00) → 六峰基部(7:30) → 取付(7:40) → 六峰(7:50) → 五六コル(7:55~8:30) → 五峰頂(9:00~9:20) → 六峰基部まで逆ホッカ。

本隊(5名): CI発(8:00) → 八峰(8:35) → 七峰(9:05~9:20) → 六峰基部(9:40~10:15) → 五六コル(10:55) → CI camp 設営(11:10~12:00)

CI隊: CI発(12:00) → CI着(14:00)

七峰の登りに10m, 七峰と六峰基部間に10m, 15m, 5mのfix zailがそれぞれ酒沢側へ固定されている。六峰基部より六峰頂まで高度差約150mで下半は60m上半は30mのfix zailが固定されている。登高傾斜は45°~50°と思われる。CI隊帰路は新人はzail確保で下る。CI予定地は五峰頂であったが、11時より天候悪化し風雪となり、CIの位置として五六コルと五峰頂と下ツツに際し、余り大差ない(せいぜい30分位)と判断し、CIは五六コルに建設。

12月31日(金) 猛吹雪、月20% 気温 -20°C

天候図は典型的な冬型。季節風の吹き出しが一泊中荒れ狂った。下界では

はいていりし。

○沈殿、CD 起床(3:00) 朝食(5:00)

○本日アタック体制を整えたが、吹き荒れる悪天のため休養日とする。

1月1日(土) 猛吹雪、風 15% 気温 -20°C

○冬型天気図は想かわるす。昨日からの強風は一晩中吹き荒れ一時は天幕維持困難を憂念するほどであった。待望の初陽は拝めず。

○起床(5:00) 朝食(6:00)

アタック隊(2名) CI発(8:30) → 五峰(9:00) → 四峰(9:30) → 三四コル(9:35~11:00) → CII 帰着(12:45)

サポート隊(2名) CI発(8:05) → CII(9:40~10:20) → 三四コル(11:00 → CII(12:45~13:00) → CI着(14:40)

○昨日よりの強風雪は一晩中続き、今日のアタックは体制を整えたが、7時頃まで、界の様子アタカい、進いながら奥穂高岳を目標にしなくも条件次第で行けり所で行くという前提で出発したが、三四のコルで三峰の登攀の順持ちで1時間25分持たず、以後行動を速くすることは時間的に無理なため引き返す。

1月2日(日) 猛風雪、風 20% 気温 ~~-21~~ -21°C

○いせんとし冬型はくかわるす、山岳気象解説によると、日本海側では風は弱まり、山の天気はかたやかとなる。東支那海にある高気圧が日本とああい、次第によくなる寒波は東に移動してやわらぐ。実際には一日中荒れ狂い、夕刻には瞬時最大 25~30% の風が吹き、テントはあおられ寸前のところだった。

○起床(3:00) 朝食(3:50) 準備(5:00~)

アタック隊(2) CD発(6:45) → 五峰(7:30) → 三四コル(8:20~9:35) → 前穂頂(11:33~13:30) → CII着(14:05)

サポート隊(2): CIより天峰基部に引き返す。

○山岳気象解説を信じ、attack 出発、朝は粉雪の吹雪をつけていたが、風は比較的弱く、10%以下であった。8:00頃より風が強まり、昨日、一昨日同様風雪の荒れ狂う最悪の天候となった。CI~CII間のトランシーバー交信不能となり、CIからのサポートの連絡もなく attack 隊の行動が再び順持のため時間を要し、前穂高岳頂でも適正気速存判断に付いたため CII 帰着が、あつた G.D.M. があることを知らせかけたことによりお詫言ひしてかまます。

1月3日(月) 快晴、風やや強し。

○気圧配置は冬型で、高気圧が日本を通過したため、一日中快晴に恵まれた。1月はいせんと 10~20% を強かった。この後、気圧の谷が通り模様なので、20天気を今日一杯で明日は再びくす小子があろう。



(IIa) : 起床(11:45) 倉庫(12:30) 撤収(13:00~14:30)

(IIa) : (15:35) (17:30) (I着(18:30)) -- (II着(19:45))

(II着(19:35)) → Y峰(11:45) → (I着(12:15))

この数日続いた悪天とほぼ同じであった。一点の曇りもない快晴で、昨日の雪はく戦をしない。兵員にはやる欲望をかき立て、眼前に朝陽をにほはる実穂を眺めて飽かす。

(Iも撤収できないこととなったが、刻がたい気持ちで引かぬのと、時間が少く遅くなりすぎることを感じて(I泊)とす。

1月4日(火)雪、風やや強し。

気圧の落ち込みで日本海に低気圧が押し寄せてきた為、気温は高かり、一日中湿り雪が降った。

起床(5:00) 倉庫(6:00) (I撤収(7:00~9:00))

(I着(9:10)) → 本村小屋 → 祥川出合(→ 徳沢 → 本村小屋 → 大正池建設小屋)

燃料はあまり残っていないが、天幕を張、天幕と内張が凍りついていたり、重量、体積ともに以外と大きく、湿り雪で身体は上から下、外から内までぐっぐぐぬれて疲労過度。

1月5日(水)雪、風やや強し。

起床(5:00) 倉庫(7:30) 小屋出発(9:30) 沢渡着(11:30) 上田着(20:45)

朝倉庫が少くトラップがあり、朝倉庫出る。

積雪50~70cm、トレース全くなし。腰から胸までつかえるセルに苦闘すること1時間半で進行わずか1km弱。後、数々のラッセル車(?)到着で荒い道も中取り、後に続く。

## 2. 係の反省 (簡単に)

### 1. 装備係

— (1) —

#### (1.1) 装備

・“ナベでんぐりかえしヤケド事件” “ゴツェル不良風と共に去りぬ事件”があったこと。

・これにフリス、タラタラと述べたら、きりがないのでやめる。

・その外、簡単に、気がついたら袋をあけては、

・我々の部にトランシーバーを備え付けたいこと。(O.B.の援助?)

・ナイロンの New Tent が軽量であること → 機動を増進。

- ・新しく購入したスコップ、テルモスが非常に効力を発揮したこと。
- ・ヘッドランプの管理には細心の注意を払うべきこと。

## (1.2) 燃料

(Ⅱ)では石油・ガソリンが不足がちになり、メタノールの併用でうまくやりぬけることができた。これは、-20℃という寒気のため、暖房に消費した量が大きかったため。

又、これは人数に関係なく、テント1張における日平均消費量にも関連性があった。その年の気候、合宿地、人数、日数などにもよろうが、従来の方計算法(1名、0.25ℓ、ガソリンは石油の25%以内)で行っていたら、今回明らかに燃料不足の事態が起っていたであろう。結果をみていえる、"まず、まず"と叫んだところだが、入山前にして、突然人員の変動があり、我々のカンテ持参量を決定した。これが、全く、偶然にも消費量の一致したことは喜ぶべきか、悲しむべきか? この様な理由から、この合宿のDataは極めて、後々の合宿のために、重要な意義を奏するものといえよう。即ち、1人当り、1日平均消費量は、石油:0.265ℓ、ガソリン:0.041ℓ(その比、87:13)であって、従来の方計算法より、雪山山行においては、やや多く見積るよう、改める必要があるのではなからうか。

次にメタマであるが、従来使用していた圓型メタノール(カンテンで固めたもの)よりも実験室で使用する液体メタノールの方が燃焼性から比較すれば、目も痛くないし、より優れているといえる。危険性、火になることが欠点であるが、ポリタンに入れて十分注意して取扱うようにしたら、なかなか便利なものかも知れない。

ローソクについては、未だ"優秀品の発見に及ばず"頭痛の種。次回からはあらかじめ、口ウモカンテに入れておくと、試験的にやってみよう。

マッチは大部余欠が気にしない、気にしない、気にしているところだ。

## (1.3) 医療

合宿中、使用した薬品は、「やけど」「凍傷」「切傷」など外傷だけが目立ったが、その数も少く、装備係として、何の気苦勞もせず済んでしまった。特に凍傷の場合、どんな薬品を選定すべきか不明なる故、凍傷用の薬の用意はしなかったが、「火傷」と同類のものとして判断し、その処置を行った。

## (1.4) 最後に、今後に残された問題点について。

### ○金がかかり過ぎた

直接的原因……紛失品、消耗品など新たに購入するものが多かったこと。

間接的原因……会計との連絡の不徹底と装備費見積のあいまいさ。

### ○重量制限、50kg が失敗した。

個人装備、共同装備が予想以上に重かったこと、食料係の非協力的無計画が災いしたことによる。

会計報告

岡村紀雄

4収入

食糧費	= 2300 X 6 =	13,800 + 2,300
装備費	= 500 X 6 =	3,000
年間装備費未細分		
不参加者負担金	食費	1,800
石ツ〇、〇、〇、〇の差入		1,455
食糧余分売上金		3,045

食糧 22,400

支出

食糧費	22,756
燃料費	6,225
起備費	
交通費 (マイクロバスの分)	12,000

6.

冬山合宿反省会報告

書記 杉本

1. 準備中の反省

準備中の大ききな欠陥として、食糧と会計の面が上げられる。食糧においては、一年計画がやっていたところがあるが、計画性と研究不足が目立った。たとえば買出しの前には値方などを調べておかなかったため、予算を大幅に超過したり、何をどれだけ何回からかという点の研究不足から、メニュー不足が起った。また米を持って行ったが、水が足りないでうまく使用できなかった。さらに冬山のための献立の研究不足から、その内容や量よりもものが食えなかった。そして野菜の量が少なかった事から全体の重量が増え過ぎてしまった。しかし味はいい思いをしてくるんだのは良かった。さらにつけ加えるべきことは計画の立案がおろそか、一日に何をどれだけという具体的な計画がなかった。

会計については原則のときもどうであったか、いなくてよいものは存在にしておいたことである。即ち装備費、食糧費等の徴収が会計で通さず、各係によってなされてきた。やはり、金は会計が徴収し、管理し、会計から予算に従って係に金を分配するようにしなければならぬ。そういうこと今日のようにおに貝屋が足らずに足りなかったりするように、ろりがある。

か。このように、か。このように、山の頂もか。このように、  
も。このように、午後の午後。特に不参加者は共同装備  
の。このように、このように、このように、このように、

全重量は相当重かったが、個人装備は不同品はなかった。3  
うか。杖動力を。このように、このように、このように、このように、

マイクロバスは広く取捨するため、できれば松本からの方がよい。

## 2. 合宿中の反省

全般的に行動をおこなうのがおぼろげ、村敏性にかけていた。また  
食事の用意に時間がかかりすぎたが、小の食糧と、実用も  
ある。食糧は一食分ずつ、セキアナイの袋にいれ、かつた方がよ  
い。また、食事後出発までの時間のかかり過ぎも問題だ。  
もっとバツエングを早くできなかったらうか。身仕度には食前にし  
ておいた方がよい。出発がおそいとは、途中でずたこれたり、  
二日目のように帰りの時間があんなにあつたことあるような事になる。  
そして、精神的疲労も加わって、全体として *multi work* になる  
ことあるのではないだろうか。食糧装備管理はルースな態  
があった。ナイフのフタが風にはくはれ、雪にうめつたこと  
の。このように、このように、このように、このように、

*Leadership and Membership* の面では、時々、このように、  
いかなったのは残念だ。また他人の非難はあつた。このように、  
このように、このように、このように、このように、このように、

## 3. 結果

前穂北尾根は場所としてはどうだっただろうか。北尾根の  
ような所は、冬の縦走は無理で、やはりホーラーにむけたい。  
尾根としては面白い所だ。ただ人が多かつたのが玉にきず。  
技術面からみた場合、我々には無理な計画ではなかった。  
が当初の前穂山頂に Camp を上げたのは、人員、天候等、  
から考え、少々無理なようであった。Camp の設置位置は  
たいたい適当であった。このように、このように、このように、  
このように、このように、このように、このように、

カダックに記入した詳細な机上プランをたてておく  
べきである。例えば、最悪事案発生時の連絡方法は、装備  
食糧、携帯品等について以上3のいずれか

17

### 感想文

冬山合宿を終えて 信州大学山岳会土田山岳部、妻  
今合宿は自分にとって積雪期における最初の合宿であ  
り、つまり初めての冬山合宿であった。又その期間を持  
つて合宿の準備に取りかかったのもであった。(尤もこの第一歩よ  
り大変失望した。これは合宿不参加者に対する無関心と  
参加予定者の無責任の不参加であった。この山事  
夏山以後懸念された問題であった。前もって白を打つ  
べき問題はなかったのではなかろうか。この山部の現  
在部内に在る問題である。どの山部が大きく発露する  
ためには解決(方針)は存在する問題である。これは  
部員各自の自覚を待つ以外には良い道はないのではな  
かろうか。又出発に際して某土終部員が時間的に遅れたが  
らである。しかしこの部員のみを責めても問題の解決  
は存在しない。しかし問題はここである。その一つは部員相  
互の不信感である。これは普段の学校生活の場  
においての部員相互の結びつきが弱いことである。日に度  
部室を少し集まってダブルとでも良いと思う。そのこと  
では合宿前における部員間の心掛の問題がある。合宿前  
の無理が合宿中に生じた。部員に迷惑かけたりなどし  
ないようにしよう。合宿中に俺の心に強くのこる事は前  
穂佳登、和崎正樹、など安マの語りや岩壁が俺をまね  
いてくれたことであった。"やっほりのペースはいいから  
"俺はやっほりおっおんかったよ。"河原のガ  
スには俺は悩まされた。願うに今合宿は失敗  
であったと。今合宿の教訓と今後の山行に生か  
してもらいたいと。思ふ。

妻より苦情が出ましたので、合宿後カツソフ実  
験しました。私のそれは  $CH_4$  ではなく  $100\% pure$  の  
 $CO_2$  でありますので無色無味無臭無害(たろ(時々有音)  
でありますから、あまり気にする事はないように。河原記  
述伸 前の妻君からは苦情ができたが後の森田氏から一言の  
謝罪はイヤでした。この点については僕も在兵たちと悪い敬  
服致しました。又私がシロフの石かど窒息死したか

背伸びした計画ではなか、トレーニング不足の士氣及部員への不信感、準備段階における部員同の結束のなさ、このことをマスコミの影響により「冬山=危険」と定義するから来てしまった頭の中に考え合せたときの不安感、は非常に大きかったが未知なる物への憧れや好奇心はそれ以上に強く、入山が待ちどろしかつた。合宿中私が自分自身に対して痛切に感じたことは、技術不足からくる精神面の不安定なことであった。あの魔の2日目を除き大変快調で、偉大な兵人に劣る可能性を信じつつCに入った。そこで偉大なる者かも（山をやるはガスの中からおそれかかる様な感圧感をもつて現れ、来て来た北尾根を見たとき、猛烈に感じたのである。もうだめだし、といてそのよくはさしたる恐怖心もなく六峰の難場を越えた時、又も高慢な鼻がもち上り、その数時間後のその下降で鼻はへしおれまされたのである。このようなるわづらった精神状態が起るべくならないようにならない限り真の安全山登はできないであろう。体力的には、2日目を除き大に苦しいと思つたことも、冥くて寝ることもなく充分とは云えないまでも余裕を感じた。それから登山者として思い、厳しい冬山での長期間の合宿では人の和といることがいかに大切か、またそれがいかに大切か。

O.B.会の皆さんへ、

岡村紀雄

今年4月より一年生はすべて松本で一年間一般教養を学ぶことになってます。この場合の新人の取りかかいは、先日のSAC年例会で決まっております。新人のみで一年会を作る。一年会では合宿が出来る。新人は各兵隊の合宿に少しづつ参加する。また合宿以外に行つては松本の工務生連盟のキャンプに参加し、出来れば山行は一緒にする。SAC全体は新人係をやらせ、その格別な指導を受ける。以上の様な事（1）新人合宿の日は30日無断して同じ場所で行ふこととする。又長野山兵隊の合宿の日に合宿する。昨年の結果、来年度新人合宿の時にもメンバーで行つたり、夏の間は山行の時にも合宿する等の方向で進めていくこととする。遺難対策基金を集める目的で、各地で日交面会を催し、SAC.全員の毎月50円ずつ募金し、当面の目標である20万円までもう少しの所まで募れた。この遺難基金についてはO.B.にお願ひしたい。かかひあるが別にO.B.係り知らせてやる。さう山行のときが昨秋10月30日、31日尾根尖東登攀を行つた。セバークで冷に打つた。登山して。春山について、当初の計画（早月尾根と剣岳登攀後、尾根即尾根、ハルマ峰登攀）について、特に雪国の面苦しいもので、目標を変更する事にはなやま知れずせん。

## 9. 屏風東壁登攀に成功 (概要)

① Member. 森田 (O.B). 岡村 (3年)

### ② 行動概要

10/29. 横尾 B.C

10/30. ルンセー T4 - 下部鵬群 - 大テラス. 青白新ルート試登 - 上部東稜 - 東壁ルンセーにエドバーク. (取り付くルートを間違え1時間ロス. 下部ホウショウは3ピッチホルトの連打で. 1時間15分のスピード突破. 大テラスよりハンク (大きかた.) をトラバース. ホルト40m. 直上し. 引き返す. 東稜ルート. オンホロバントのトラバースをし. 東壁ルンセーへ. 権木帯を抜けたテラスでエドバーク. 夕頃より雨になる.)

10/31. 東壁ルンセー 終了点 (ミソレ気味の雨. 指先に凍傷を負いながら登攀続行. 2ピッチ. 10m. 20mに2時間余り費す. 凍死寸前でブリュシュ帯に入る. セーターを肌に着込んで. 休まず屏風頭に向う.) - B.C.E 撤収して横尾小屋に泊る.

11/1. 下山.

### ③ 感想

合計14ピッチの快適な登攀でした。5級と6級の登攀の相違をしみじみ感じた。安全であるし. もっと取付くよりルートと思う。とにかく長年の懸案であった東壁も余裕をもって成功したことは我々にとり大いに喜ばしいと思います。(森田記)

## 10. 通信

### ① "上田登山結成の動き"

12月15日に長野登山が結成されたのに続いて現在. 上田にもその動きがある。

大衆登山の確立は専ら登山を目的とする我が部にとっても大きな意義があると思う。我が部も部の利益という個の殻を破ることで全体の利益の立場を少しでも考えることは必要であろう。現在. 会長に山岳部長が候補に上げられており. 我が部の今後の力加が今後の一定の比重を占めると思う。我々としては協力するつもりである。

### ② 遺対より

基金. 目標額20万円に. あと5万円とせまりました。これも O.B の皆さんの協力を得て. 達成しようという方針が打ちだされ. 松本・長野上

田のO.B.に、各々、2:2:1の割合で「協協力願う」というものです。但し、必ず、上田で1万円集めよというものではありません。

### ③ “海外登山研究会”

昨年のエマヤ入山禁止以来、沈滞していたこの活動を、森田(上田O.B.)氏など、1名老体を7名にして、新たに、若手によるトチトチした研究会を再建せんと、六月頃の一段落つく頃まで、任期のきれた小川(松本2年?)氏より、仮の委員長を佐藤(長野、3年)氏に引き継がれました。

### ④ O.B. 消息

石川O.G.: 冬山は池上吊尾根より北岳に行かれた。(登嶺会合宿)。その後、川より一ヶ月間、菅平スキー場に來られた。彼女にと「たか山小屋でも建ててやるよは居りませんか?」

井出O.B.: 冬山には中ア、三ツ岳に挑戦(会社山岳部)。未開の山域であるため、敗退とのこと。彼は前から目のつけ所が違ふとのこと。

永島O.B.: 冬山は白馬の杵池(名古屋山岳会)。  
最近、連絡なし。

森田O.B.: 冬山は現役の冬山合宿に参加してハッスル。2月19、20日はハテへ All Japan Climber's Ski Symposium に参加。最近スキーに凝り出し、しきりに「行へよ」とか「行かすよ」とかいう。又、上田登山の結成にしきりと動いている。

### ⑤ “春山計画案”

南アの縦走と、硫黄尾根より檜の周辺との2案があったが、19日の部会で、南アに決定。

年間計画による早月尾根は参加人員の不足等により、今日は取り止めることにした。恐らく、剣岳周辺は1966年度、冬山合宿に持ち越されることになる。

### ⑥ “おわび”

O.B., O.G.の皆様から、年賀をいただきましたが、色々事情がありまして、1名返事さし上げることができませんでした事をおわび致します。これに懲りず、できるだけ、多くのO.B.の皆様から、愉快なお便りのあることを願います。なお、「山岳部あつま」と「発見」と「遅れ」という心配がありますので、できるだけ、「修己寮 佐々木」まで、お届り下さる様、お知らせ致します。

### ⑦ “総会”への出席もお忘れなく! (後ほど連絡す)



# 11. 編集集中気付いたこと

“冬山に思う。リーダー不在”

O.B. 監督 森田 稻吉郎

冬山合宿の報告書原稿をみて気付いた点を述べた。まず合宿の総括が充分になされていらないことである。それは報告書中の部に対する個人的な批判として端的に現われている。総括とは規律と統一があるものであり、こういう形で批判が出てきたことには多くの問題があると思う。しかしどうして総括が整理して出さねなかつたかを考えると、うなずける点がある。それは残念ながら、部員間のお互いの不信感である。これは、単位制度の強化、及び山に登るに当る経済的・精神的不安定(社会矛盾からくる)と相まってかなり根強くなりつつある。お互いに利害関係のあまりない学生という立場にありながら不信感が出てきたことは、リーダーシップの弱さがその主な原因であると思う。

現在の部には部内に於ける沈滞ムード、外部に対する“SAC”に対する無方針、“教養統合に共う新人問題への無方針”、“学部祭、全学連盟等”の学内問題に対する無感心等、遅れた面も見られるが、反面、上田労止の結成への協力、三織南催(京都)への協力参加、技術的レベルの高さ等、かなり進んだ面も見られる。今後はコミュニケーションを強化し、リーダーシップを確立し、進んだ面を更に伸ばし、遅れた面を是正する積極的方針を打ち出して欲しい。

“森氏の忠告に、加えて”

佐々木 史郎

報告書原稿に対する森氏の忠告は、ハタに針を立たれた感じがよく、我々部員にはヒリッとさせられるものがある。だが、反面、私には納得ゆかぬ点も決して少なくない。部に対する個人的発言にしては、どこか肉の抜けたところがあり、私にしては、どうみても、替成で言うものとはいえない。(考えさせられる。多くの点があるが…)。「俺が部を直して…」という積極的行動が供ならぬは、ともかく「あしらくらひから、やめよう」といふ、我々から考えが未だにどんぐり頭からぬききれぬとは、まあ、何と、嘆かわしきことよ。人を信頼することは、より事かとも知れぬ。しかし、人に頼ろうとする性質を、今後、徐々に改め、自らもらわねば、我が部発展の道けあり得ない。森氏の指摘する部員相互不信感にせよ、部内の沈滞ムードにせよ(その外、すべし)。総括、我々の部がたつた問題としてかたすけられてしまふ、本当によいのであるか? あるいは、部員間の懇の場々もあるべき部室(現在は物置き室)があったら、多分、部員間の関係がよくなるであろうし、部員が15、6人も居たら? ちと、とも思われにらる。また、現在の貸借金制度でも組織されたら、(多分)活気がくまるとは、違ひない。以上、森氏の忠告をよく理解して、また、その原因がどこにあるのか、管理方針、部員間の批判、協力力を抑ぐものがある。

1965年度  
冬山合宿報告書

信州大学山岳会上田山岳部

杉本